



Title	和室と畳のイメージにみる時代変化
Author(s)	島田, 広之
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2020, 54, p. 79-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91395
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和室と畳のイメージにみる時代変化

島田 広之

キーワード：和室／畳／住宅広告／間取り／居住空間

1. はじめに

21世紀に入って以降、和室の減少が顕著である。次にあげるデータは、2005年～2007年の大阪府内で販売された新築建売住宅と2017年の新築建売住宅における和室の有無とタイプ別の割合を集計したものである（図1・図2）。それぞれの和室なしの住宅の割合を見てみると、2000年代における和室なしの住宅の割合は約16％であるのに対して、2017年の同様のデータをみると約45％にまで増加している。このように、約10年の間に建売住宅における和室ありの住宅は30ポイント程度減少している。

先行研究において、和室の減少は、バリアフリー住宅の需要が増えたことによって洋室化が進んだこと、畳のメンテナンスの煩雑さから忌避されたことなど、が原因であると述べられている（本保ほか、2018、荻原ほか、2004）。一方で、将来住居に和室を求めるかというアンケートでは、9割以上が欲しいと回答しており、和室の減少が、居住者の嗜好性とは必ずしも一致していないと指摘されている（竹原ほか、2017）。このように、和室の減少傾向は、居住者の需要とは一致していないにもかかわらず進行しており、このギャップの解明が、居住者の求める生活空間の提供には不可欠であると考えられる。住宅における間取り研究の一般的な調査手法は、事実関係の整理のために住宅市場動向や間取りの量的な調査を行い、合わせて居住者を対象に質問紙によるアンケートを行うことで、居住者の住意識と間取り変化との関

連をみるというものであった（鈴木ほか, 2008）。これらの手法は、住むための「器」として住宅を捉え、居住者のライフスタイルと居住様式について論じていく上では非常に有効な手段であると考えられる。しかし、このアプローチには現代の建売住宅が「商品住宅」であり、本来供給者側によって作り出された消費の対象であるという視点が欠如していると指摘できる。従来研究では、供給者側が居住者側のニーズを十分に反映した間取りを作っていることを暗黙のうちに前提としており、情報の非対称性が大きいとされる不動産市場を考慮した検証がなされているとは言い難い。本論文では、建売住宅における和室の減少と、根強いニーズというギャップの一要因を明らかにする目的で、和室及び畳の歴史的背景を整理するとともに、建売住宅を「商品住宅」という観点からとらえ、テキストマイニングによる、住宅広告における和室のイメージの変化の調査を行った。

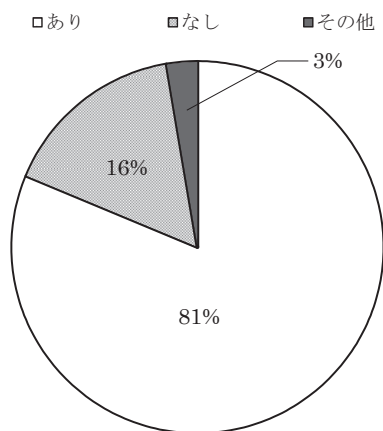


図1 建売住宅における和室の割合
(2000年代 n=299)

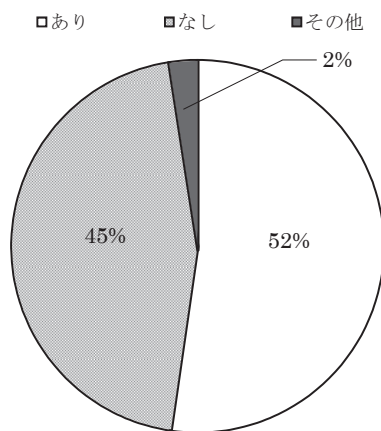


図2 建売住宅における和室の割合
(2017年 n=299)

それぞれ『住宅情報style 関西版』、WEB版SUUMO掲載の住宅情報を用い筆者が調査。

2. 和室イメージの歴史的変遷

和室という言葉は、明治期において、西洋化の過程で入ってきた洋室に対しての概念であるが、人々のライフスタイルの変化に伴って、その語が持つ意味が概念とともに変化していった言葉である。ここでは、和室および畳についての歴史的な変化と、その背景にある当時の人々のライフスタイルとの関連を整理していくことによって、現代住宅における和室の位置付けについて確認する。

先行研究において、現代の和室の特徴のうち、居住者にとって特に関心の高い要素として、(1) 落ち着く、くつろぐ、安らぐといった総合的良さ、(2) 日本人だから、日本文化の継承に必要、仏間は必要、といった文化的要素、(3) 足を伸ばせる、寝転がれるといった起居様式に関する要素、(4) 多人数でも利用可能、多目的に使える、といった空間の機能性に関する要素、の4つがあげられている。これらの特徴を別の視点で見ると、(3) 起居様式に関する要素は畳空間に起因する要素であり、(4) 空間の機能性にまつわる要素は、転用性に関する要素であり、これもまた和室が畳空間であることに起因する（竹原ほか, 2017）。

一方で、(2) 文化の要素、(1) 総合的良さは和室空間全体にかかる要素である。これらの要素は住宅史の中でどのような文脈に紐づけられ、現代の和室イメージの中に位置付けられているのか、住宅史における畳空間と和室の変遷をみていくことを通じて、現代の和室及び畳空間の位置づけについて確認する。

畳の歴史は古く、用語としては『古事記』にも登場しており、また『枕草子』や『源氏物語』などにも畳を使用する場面が登場している。しかし当時の畳とは、現在、一般的に用いられているようなものではなく、広く敷物という意味で使用されていた¹⁾。当時の記録から、筵（むしろ）をいく枚か重ねたようなものと考えられており、持ち運びのできる敷物として屋内外で広く

利用されていた。当時の畳は常設するのではなく、人が座るときにのみ使用され、座らないときには畳まれてどこかに収納されていたと考えられる。

畳の使われ方に変化が見られたのは、平安時代末期からとされている（大河, 1986）。当時の貴族の住居である寝殿造では、様々な生活の道具が家具として設えられ、畳もその一つとして座具・寝具として用いられた。ここの畳は現在のような厚みを持っており、権威的意義や、断熱性能を担保するといった機能的な意義があったと考えられる。またイグサの畳表もこの時代に出てきたとされている（岡崎, 1981）。畳に厚みが出てくるとともに重量も増し、それまでの畳が特徴としていた動かしやすさや、持ち運びのしやすさは失われていった。

この時代の畳は、室全体に敷かれるものではなくあくまでも座具・寝具として機能上必要な部分にのみ用いられてきた。また、この時代の庶民の間で用いられていたものは、厚みのある畳ではなく、従来通りの筵がまだ一般的であった。

全体に畳の敷き詰められた室の誕生は室町時代の末期とされている。室町時代末期、茶室の出現とともに、書院造や武家の住居、寺院などで畳が敷き詰められた室が出てきた（岡崎, 1981）。ただし、これは住居全体ではなく、あくまで茶室のように様式が確立され、使用の目的が明確な独立した室に現れた現象である。ほかの室は、従来通り板張りのものであった。常設の畳室の誕生を契機に、これ以降、畳の種類やサイズの規格化が行われていくことになる。書院造では、畳敷きであることに加えて、床の間や違い棚のような常設の設えも見られ、畳が空間様式の一部として認識されたと考えられる。ここで畳ははじめて、室内に設えられる家具の一つから、建材の一つとして、すなわち建築物の構成要素の一つとして捉えられるようになった。この室に敷き詰める畳のことを、敷きだみと呼び、置き型の畳とは区別する。ここで誕生した和室の原型は、支配階級の地位の象徴であり、地位の象徴としての和室イメージは、現在の客間としての和室イメージへとつながっていく。

和室が庶民の生活へと広まっていったのは、江戸時代になってからのこと

である。江戸時代中期、数寄屋造や茶道の発展、普及とともに全面畳敷きの空間は徐々に町民の間にも普及していった。これらは、日常の接客空間や、冠婚葬祭の際の空間として使用されることになる。また、江戸時代末期から明治にかけて、農村部にも畳の敷き詰められた室²⁾は普及していく。

明治時代になると西洋文化が庶民の生活にも流入し始めた。その影響から、椅子座の生活文化、和洋折衷の住宅空間が誕生した。西洋文化の流入当初は、畳の部屋に椅子を設えたり、洋風の接客空間を伝統的住居の横に備えつけたりと、様々な試行錯誤が行われた。

その後大正時代に入り、伝統的な生活空間としての和室と洋室の優れた面がうまく取り入れられた住宅が登場する。この時期の大きな特徴には、室の機能分化、畳敷きの茶の間の誕生、家族本位の住宅計画が挙げられる。ここでは、これまでの住宅で一般的であった接客空間重視の住宅から、西洋的な家族本位の住居へと生活スタイルが変化していく一方で、日本で従来より使われていた畳敷きの室にダイニング機能を持たせた茶の間が普及していく。ここでの茶の間とは、食事のための部屋であるとともに、家族の「憩い」、「団欒」の場としての性格がある。また家族本位の住宅において、茶の間は日当たりの良い南側に作られ、家族のための中心的な室として機能することになる。ここで誕生する茶の間のイメージは、現在においても和室の「憩い」、「団欒」の場としてのイメージにそのまま引き継がれたと考えられる。この時代においてはじめて、客間としての畳空間と、家族での団欒空間としての畳空間があらわれた。

和室は戦前期の日本の庶民住宅にとって一般的な居室であった。そして、戦中・戦後の住宅難の時代において和室はその転用性を活かし狭小空間でも生活機能を満たすことのできる空間として計画された。当時の国民住居では、一つの和室をちゃぶ台を配置することで食事室に、ちゃぶ台を片付け、布団を敷けば家族の寝室にと、和室の転用性を活かした計画がなされていた。

しかし、戦後になると、狭い住宅であっても、食事の場と就寝の場は分けて使用される生活の実態が明らかになる。計画されていた室の転用性が機能

するためには、食事から就寝までの時間が家族全員で一致していないと難しく、一人が遅くに食事をとる場合や、病気で1日中寝る場合などにはうまく機能しない。また布団の上げ下げによる埃の問題や、食事後の食べこぼしの問題など、衛生的にも敬遠されていた。実際の生活では食事室部分の家具は就寝時も片付けられず、他の個室を寝室として利用されていた。これ以降、食事室は転用を想定しない室として計画され、板張り・椅子座のダイニングへと洋室化され発展していくことになる（住総研, 2009）。

1955年の日本住宅公団設立以来、公団の住戸計画は2居室とダイニングキッチンからなる「2DK」を中心に様々な間取りを供給してきた。しかし当初の計画にリビング想定されず、家族団欒のような生活はダイニングキッチンに隣接した和室で行われることが想定されていた。また、ダイニングキッチンに接続した和室は、転用性を活かし就寝時は寝室として使用されることが想定されていた。しかし1960年に行われた公団住宅の住まい調査で、ダイニングキッチンに隣接した和室にはソファ、テーブル、テレビなどが設置され、ダイニングキッチンとの間にある襖が取り払われダイニングキッチンと一体的に利用されていることが報告された。また当初想定されていた就寝時の寝室利用はなされていないことが報告された。リビングのように利用される和室の報告を受け、1963年の『公団住宅 63 型標準設計資料』には居間に関する項目が盛り込まれ、「3LDK」の計画が1967年に標準設計化されることとなる。ここではまたしても和室の転用性を活かした平面計画が庶民生活の実態とそぐわず家具据え置き型の洋室へと変わっていくこととなった。

高度経済成長やそれに伴う住宅建設ブームの中で、理想のマイホームの形として都市勤労者に広く普及していった住宅が、現代に通じる「nLDK」と呼ばれるものである。平面計画に制約の大きな集合住宅では、定型化され、この間取りを基準として大量供給が行われた。これが「定型 3LDK」と呼ばれるものであり、間口が狭く奥行きが長い平面住戸の中で、中央部分に水廻り、バルコニー側にはLDKと和室、玄関側に個室を配するものである。住田らは、そこでの生活実態としての「ワンルーム化」の傾向を指摘してい

る。この「ワンルーム化」というものは、リビングとその隣接を一体にして利用する居住実態のことであり、この傾向が、床面積が狭い場合だけでなく、大きくなっても変わらずにみられることを指摘した（住田ほか, 1979）。

日本の現代住宅の間取りのルーツと考えられるものは、これまで見てきたような「2DK」、「3LDK」といった公私室型の近代型住宅の他に、続き間型住宅と呼ばれる伝統的住宅が存在する。続き間型住宅とは、座敷とそれに接続する間である次の間を有する住宅である。このタイプの住宅は戦後期に入っても地方都市や農村に根強く残っていた。これらの地域では冠婚葬祭や地域の寄り合いのような伝統的な慣習が残っており、近隣住民が多く集まる機会に大空間として利用できる空間が必要であったことが主な要因であると考えられている。

しかし、従来型の続き間型の住宅でも次第に使い方に変化が見られるようになってくる。従来の座敷は日常に利用される空間ではなかったが、1980年代になると実用的な空間として日常的に利用される例が多数報告されるようになる。1986年の松原らの調査では和室の転用性を活かして、接客空間と日常空間を両立させた使用方法が報告されている。日常における就寝と日中の生活における転用はうまく実現しなかった和室であるが、接客行為と日常行為の転用については生活の中で行われていた。

ここまでで見てきたように、和室空間は様々な時代の中で変化し、現在に至る。またその中で様々なイメージが付加され現代にいたることになる。

はじめは空間の中の一つのしつらえに過ぎなかった畳は、様式化し敷き詰められることで空間の大切な要素へと変化していった。室町時代に誕生した和室の原型は、支配階級の権威の象徴であり、客間としての和室イメージへとつながっていく。また、明治時代に誕生する茶の間は、食事のための部屋であるとともに、家族の「憩い」、「団欒」の場としての性格を有していた。また家族本位の住宅において、茶の間は日当たりの良い南側に作られ、家族のための中心的な室として機能することになる。さらに戦後期に入って誕生する、家族の日常を大切にする、家族中心型のアットホームな住居観はさら

にこのイメージを強化していったといえる。ここで誕生する茶の間のイメージは、現在においても和室の「憩い」、「団欒」の場としてのイメージにそのまま引き継がれることになる。

また、和室はその転用性を活かした計画がなされることが多かった。そして戦後には、その転用性がうまく機能せず洋室化されていくことになる。しかし接客行為などの非日常的イベントが発生した時には和室の転用性は活かされ、和室が利用された。

3. 住宅広告における和室表現の変遷

ここまででみてきたように、和室空間は時代ごとの生活様式を踏まえ、様々な用途に利用されてきた。さらにその文脈は現在の和室にも引き継がれているといえる。本章では2019年と2000年代の新築建売住宅の広告における和室のテキストを分析することにより、言説の変化から用途・イメージの変化を考察する。ここでは住宅広告におけるテキストが供給者側による和室の価値表現の一つであるとし、その変化を見ていくことで和室に対する価値観の変化を見ていくこととする。

大阪府内の新築戸建住宅情報を多数掲載しており、2000年代から現在に至るまで継続的に情報のある資料としてリクルート出版の『週刊住宅情報関西版』³⁾の2004年から2007年の物件情報の多い1月2月分と2019年の1月2月掲載の住宅広告からランダムに抽出した約100件を分析対象とした。今回対象としたテキストは住宅情報掲載の住宅広告における和室の写真・パース及び平面図に付加された文字情報であり、和室に関することを述べたものとした。これらのテキストを、テキストマイニングを行うことにより出現頻度を比較した。

今回分析したデータは2000年代データ件数86件、単語総数639語、2019年データ件数86件、単語総数684語であった。

まずそれぞれのデータを年代ごとに見ていく（表1）。まず2000年代のテ

キストの出現頻度の上位 30 件を見ていくと、和室、する、ある、モダンと続いている。これらの用語からその場所を示す和室・空間などの用語と、一般的にどのような文脈でもよく使用される、する、あるなどを除くとモダン、リビング、床の間、客間と続く。

2019 年のテキストの出現頻度の上位 30 件をみると、和室、する、空間、リビングと続いている。これらの用語からその場所を示す和室・空間などの用語と、一般的にどのような文脈でもよく使用される、する・あるなどを除くとリビング、客間、昼寝、お子様と続く。

この表からもリビングや客間などの用語は年代によらず和室と関連づけられる用語であることがわかる。また 2019 年のデータではそれ以外にも子供、昼寝のような子育てやくつろぎを連想させる用語が多く見られた。抽出した単語を意味の近いもの同士を類型化し、(1) 伝統的な和の空間、(2) 現代的な和の空間、(3) 客間としての和室、(4) 子育ての場としての和室、(5) 団欒・くつろぎの場としての和室の 5 つに分類した (表 2)。分類した 5 項目に関して再度集計した (表 3)。

2000 年代のデータでは (1) 伝統的な和の空間は 52 件、(2) 現代的な和の空間は 34 件、(3) 客間としての和室は 27 件、(4) 子育ての場としての和室は 2 件、(5) 団欒・くつろぎの場としての和室は 17 件であった。2019 年のデータでは (1) 伝統的な和の空間は 33 件、(2) 現代的な和の空間は 21 件、(3) 客間としての和室は 35 件、(4) 子育ての場としての和室は 29 件、(5) 団欒・くつろぎの場としての和室は 54 件であった。

2019 年の住宅広告における和室表記は 2000 年代に比べて、(1) 伝統的な和の空間については減少、(2) 現代的な和の空間に関する表記は少し減少しており、(3) 客間としての和室に関する表記は横ばい、(4) 子育ての場としての和室、(5) 団欒・くつろぎの場としての和室に関する和室表記は大幅に増加していることがわかった。2019 年では伝統的な和室イメージよりも子育てやごろ寝・昼寝などのくつろぎイメージを与える表現が多く見られることから、和室をよりプライベートな空間としてイメージしているように考

えられる。一方で客間としての和室表現は一定数存在することから、一時的な応接室・ゲストルームへと和室の転用性を活かした提案がなされているようである。また全体的な傾向として(1)、(2)の表現が減少しており、(4)、(5)の表現が増加していることから、和室の様式やスタイルに関する表現が減少しており、和室の使い方に関する表現が増加していることがわかる。これは和室のイメージが伝統・古さと現代風・新しさの間で対立し、様式的なイメージが和室にとって重視された時代から、生活に基づいた具体的なイメージへと関心が移ったことを示しているといえる。

このように、2019年の和室に関する表現は2000年代のものと比べて明らかに異なる傾向を持っている。2000年代の表現では和室の伝統的な価値のアピールや伝統にとらわれない現代風和室の提案など和室の形式的なイメージに言及する表現が多く見られた。それは和室の価値を従来通りの価値観と、そこからの脱却を図る価値観の対立による結果であり、従来より続く和室の価値からの転換の過渡期であったと言える。そのため、2000年代は和室の使い方に関する価値の提供よりも、当時の洋室化の波の中で、和室の要不要を巡る議論のもと和室そのものの価値づけが行われていた時代であったと言える。しかし、現在の間取りには和室なしの住宅も多くみられる。そのため2019年の表現ではより具体的に和室の使い方に関する表現が多く見られるようになった。そこでは、昼寝やキッズスペースのような私的利用がなされる空間としての和室像が浮かび上がってくる。また来客時にはリビングの付属室として転用性を活かしゲストルームとなる続き間型和室からの影響も確認できる。また、この変化は形式から機能性への着目というだけでなく、機能性への着目が、床材としての畳の機能性におけるものであったことについても述べておく必要がある(表4)。

表1 年代別テキストの出現数

	2000年代	件数	2019年	件数
1	和室	66	和室	63
2	する	32	する	34
3	ある	23	空間	30
4	モダン	13	リビング	24
5	リビング	12	ある	18
6	できる	11	客間	16
7	空間	11	昼寝	16
8	床の間	10	お子様	15
9	客間	9	落ち着く	14
10	落ち着く	8	くつろぐ	11
11	琉球畳	7	来客	10
12	畳 コーナー	6	和	9
13	和	6	収納	8
14	使える	6	使える	8
15	畳	6	畳	8
16	独立	5	できる	7
17	LDK	5	部屋	7
18	襖	5	モダン	7
19	なる	5	便利	6
20	配置	5	遊び場	6
21	ゴロ	5	心	5
22	設ける	5	利用	5
23	寛げる	5	重宝	5
24	設置	4	隣接	5
25	広い	4	おしゃれ	5
26	使う	4	赤ちゃん	4
27	雰囲気	4	リビング 横	4
28	坪 庭	4	いただける	4
29	趣	4	使う	4
30	風情	3	雰囲気	4

表2 抽出したテキストの価値類型

テーマ	単語
1, 伝統的な和の空間	和、日本、襖、趣、障子、茶の間、市松、畳、床の間、風情、坪庭、佇まい、伝統、続き間、仏間、格調、飾り棚、茶室、格子戸、しきたり
2, 現代的な和の空間	おしゃれ、琉球（風・調）畳、大壁、洋風（北欧風）、現代風、新しい、モダン、違和感ない、板畳、敷畳、デザイン
3, 客間としての和室	客間、来客、お客様、客室、おもてなし、ゲストルーム、両親、来る、泊まり、親戚、友達家族、泊まる
4, 子育ての場としての和室	お子様、遊び場、遊び、オムツ替え、遊べる、親子、子供
5, 団欒・くつろぎの場としての和室	落ち着く、昼寝、くつろぐ、癒す、安らぎ、ゴロ寝、家族みんな、心地よい、団欒、リラックス

表3 類型別テキストの出現数（年代別）

テーマ	2000年代	2019年
1, 伝統的な和の空間	52	33
2, 現代的な和の空間	34	21
3, 客間としての和室	27	35
4, 子育ての場としての和室	2	29
5, 団欒・くつろぎの場としての和室	17	54

表4 ダイアグラム—現代までの和室変化の特徴

	2000年以前	2000年代	現在
和室の特徴	床の間などさまざまな要素	現代風の和室の登場	畳に集中
テキスト		伝統／現代的	具体的な生活提案

4. 現代における和室と置きだたみ

このように現代における和室のイメージは一要素である畳へと集中していると考えられる。ここでは、現代の畳の傾向を踏まえたうえで、現代における和室について考察する。

2019年の住宅広告では、子育てに関する提案が多くみられた。先行研究において、子育てと畳の関係を調査したものとして、近年増加傾向にある幼稚園・保育園における畳の導入実態及びその使用方法及び評価を調査したものである（正岡ほか, 2016）。ここでは敷きだたみ（約7割）と同様に置きだたみ（約6割）が施設で利用されていることが指摘されており、低年齢児向けの保育空間や医務室として利用される敷きだたみに比べて、置きだたみの空間は、プレイルームや多目的室などの動的な空間にも利用されていることが報告されている。またその特性から幼稚園では、敷きだたみよりも置きだたみが活用されている。これらは、後から設置でき、動かして使える置きだたみの特性を生かしたものである。また、畳に関する関心事項として、衛生面での不安が高く、「新たに畳を使用するなら」という質問では、イグサの畳に比べてウォッシュアブル畳の人气が高かった。

このように、幼稚園・保育園において、置きだたみは、子育ての様々な場で活用されており、特に高年齢児の空間では、敷きだたみよりも利用されていた。置きだたみとは、床の上に置く、簡易に設置できる畳のことであり、普段和室で使われる畳とは、敷きだたみとして区別されるものである。置きだたみの主な特徴として、(1) 設置の簡易性、(2) 豊富なバリエーション、(3) 可動性、(4) コーナー配置への適性、があると考えられる。(2) 豊富なバリエーションは、全体に敷き詰めるために専門の制作技術が必要な敷きだたみに比べ、コーナーに配置する置きだたみは、規格化されており、参入障壁が少ないためである。それにより様々に差別化された製品が並んでおり、素材・色・大きさ・形・機能性などにおいて多様な製品ラインナップと

なっている。(4) コーナー配置への適性とは、置きだたみは、フローリング室への設置を前提にデザインされており、そのため、洋風リビングに設置された時に、デザインの齟齬が生じにくくなっている。

置きだたみにおいて、和のイメージはどのように提供されているのであろうか。置きだたみにおける販売大手である、大建工業株式会社の製品についてみていくと、「和の象徴である畳でも栗色の小波なら、シックでシンプルなアーバンモダン風に。ラグのような印象の織り目が、空間に上質なくつろぎをしつらえます。」(大建工業株式会社小波カタログより)のような畳に和のイメージを反映した記述や、「フローリングのリビングに、畳を置いてプレイルームに。寝転がって映画鑑賞や、お子さまの友達を招いての遊び場。お手入れ簡単で、気兼ねなく出したり仕舞ったりできます。」(大建工業株式会社彩園カタログより)、「お子さまが小さく室内遊びの多い間は、フローリングの上に置き敷きタイプの畳を。おもちゃを落としても傷やへこみが気にならず、廊下への音も抑えます。」(大建工業株式会社小波カタログより)のような、畳で行われる行為を扱った記述がみられる。

このように、和室への関心が、畳の機能性や子育てにおける活用に移った結果、市場において、置きだたみという新たな競合を生み出した。畳に子育てでの活用を求めていく場合、機能性を考えると置きだたみの普及が促進されと考えられる。インテリア商品である置きだたみは、増加傾向にあるものの、間取りには表れてこないため、従来の平面図を用いた間取り調査では、現状を把握できない。そのため、冒頭で示した、和室の需給におけるギャップは、空間ではなく、インテリア商品として代替されている可能性があるといえる。

5. おわりに

歴史的に見れば、本来の畳は板張りの床の上に部分的に設置されるものであり、本来は室の一部に設置することが主流であった。しかし、畳の厚みが

厚くなり、重くなるにつれ、敷きだたみが普及していく。敷きだたみの普及を支えていたものは、様式としての畳の必要性和、断熱性能及び権威的意義によって高さが必要とされたからである。また、戦後の洋室化のなかで、和室の可能性と指摘されていたのは、和室の転用性であった。

本論にて調査した住宅広告における年代変化を見ると、和室における畳の機能性に着目した広告が増加していることが確認できた。また近年の保育所での畳の導入事例や、置きだたみにおいても同様の表現が用いられていることから、和室の要素において畳の重要度が高まったことは、様式的に和室の一つの構成要素であった畳ではなく、インテリアとして独立した価値をもった畳像へと変化していったといえる。置きだたみは、権威的意味付けによる厚みが必要とされず、現代の断熱技術によって、断熱性能のために厚みを持たせる必要がなくなった現代において、畳表の性能を上げ、かつての筵に近いものとして再度、和室の歴史的文脈の中に位置づけられるのではないだろうか。

また、畳のインテリア化により、和室の中に畳があるのではなく、畳があるから「和っぽい」という関係が起こる。このように、本来建築様式であった和室というものが、生活スタイルの変化や技術の向上とともに解体されてゆき、インテリアとしての畳を用いた空間として展開していく可能性がある。多様なライフスタイルが受容されている現代において、畳の転用性を利用した従来型の住宅計画でなく、インテリアの可変性によって、空間をデザインしていくことが、必要になるのではないだろうか。

[注]

- 1) これらの文献には「多多美」の表記にて掲載されている。
- 2) ふすま等で仕切られた間や壁で区切られた部屋などが室として利用されていた。
- 3) 年代ごとに『週刊住宅情報』から『住宅情報 style 関西版』、WEB版SUUMOへと名称・媒体を変更しながら現在に至る。

[参考文献]

- 朝来野友絵・岡俊江・鈴木義弘・切原舞子・安田浩子「座敷とだんらん空間からみた新築分譲住宅の平面構成の変容過程に関する研究 ―第6報リビングルームの接客使用と接客空間の変容」日本建築学会研究報告九州支部3計画系45、2006年、77－80頁。
- 岩岡竜夫・坂本一成・加茂紀和子「商品化住宅の外形イメージにおける言葉 ―現代住宅の意匠性に関する研究」日本建築学会計画系論文報告集383、1988年、141－149頁。
- 内田隆三『消費社会と権力』岩波書店、1987年。
- 江崎雄治「居住環境評価からみた住民の価値意識」地理学評論68－3、1995年、168－179頁。
- 大河直躬『住まいの人類学 ―日本庶民住居再考』平凡社、1986年。
- 岡崎喜熊『敷物の文化史』學生社、1981年。
- 川村道乃・今井範子・伊東理恵「住宅平面における畳空間の動向 ―首都圏の注文戸建住宅における―」日本家政学会誌57－1、2006年、39－52頁。
- 北川啓介・東田夏海・上間鉄平「建築物の言語描写における〈日本らしさ〉の多様性」日本建築学会計画系論文集84(756)、2019年、477－487頁。
- 京都ノートルダム女子大学生活福祉文化学部『生活へのまなざし Part I』ナカニシヤ出版、2004年。
- 京都ノートルダム女子大学生活福祉文化学部『生活へのまなざし Part II』ナカニシヤ出版、2008年。
- 久保加津代・関川千尋・西島芳子・町田玲子『住生活論 ―家族の自立と共生のために』化学同人、1995年。
- 久保倫子「水戸市中心部におけるマンション購入世帯の居住地選択に関する意思決定過程」地理学評論81－2、2008年、45－59頁。
- 小原二郎『インテリア学辞典』彰国社、1995年。
- 財団法人住宅総合研究財団『現代住宅研究の変遷と要望』丸善株式会社、2009年。
- 小路英美・岡俊江・鈴木義弘・切原舞子・谷川直憲・本結千智「居間中心型住宅の座敷(和室)とLDK空間のとられ方について：居間中心型住宅普及の動向と計画課題に関する研究第2報」日本建築学会大会学術講演梗概集、2008年、153－154頁。
- 鈴木義弘・岡俊江・切原舞子「居間中心型住宅普及の動向と計画課題に関する研究」住宅総合研究財団研究論文集35、2008年、143－154頁。
- 住田昌二・中島香代子・三枝小夜子・江口敦子・竹田喜美子「集合住宅における住様式の発展に関する研究」住宅建築研究所報5、1979年、121－139頁。
- 多木浩二『生きられた家』岩波書店、2001年。

- 竹原広実・佐々尚美・梁瀬度子「居住者の和室に対する思い入れ及び要求と今後の和室の展望について」日本家政学会誌68-12、2017年、674-686頁。
- 多治見左近・延藤安弘「敷地規模の定住・住みかえ意識に対する影響に関する考察」日本都市計画学会学術研究発表会論文集17、1982年、253-258頁。
- 富田和暁『大都市中心地区の変容とマンション立地』古今書院、2015年。
- 刀根令子・浅見泰司「住替え前後の住宅の改善度比較による住環境要素の選好階層構造：2003年住宅需要実態調査を用いた分析」日本建築学会計画系論文集第71-8、2006年、111-118頁。
- 刀根令子・浅見泰司「居住者の価値観と住環境履歴が将来の住環境選好傾向に及ぼす効果」日本建築学会計画系論文集72(616)2007年、23-30頁。
- 萩原美智子・立花綾子・土井孝子・中西花乃実・藤原夏子「住宅建材についての消費者知識：その1 関西地区住宅情報誌にみる畳の使用状況と消費者の畳維持管理意識」大手前短期大学研究集録24、2004年、211-223頁。
- 早川玲理・浅見泰司「居住者タイプに応じた住環境適地マップの構築」都市住宅学47、2004年、148-153頁。
- 平井郁子「畳の歴史と畳表の変化」大妻女子大学家政系研究紀要47、2011年、121-126頁。
- 本保弘子「関西地方における分譲集合住宅の住戸平面特性について—1997年、2007年、2017年の比較—」神戸女子短期大学論攷63、2018年、41-57頁。
- 正岡さち・井上直美・亀崎美苗・田中宏子「幼稚園・保育園における畳の使用実態」島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)50、2016年、131-139頁。
- 室恵子・須永修通・藤直明「居住環境評価のための用語の特性に関する考察：心理評価の抽出方法に関する研究(4)」日本建築学会計画系論文集65(534)、2000年、69-75頁。
- 山本理奈『マイホーム神話の生成と臨界—住宅社会学の試み』岩波書店、2014年。
- 山本理奈「都市における住宅の商品化とその変容—家庭の空間から身体感覚の空間へ—」社会学評論62-2、2011年、172-188頁。
- 山本理奈・内田隆三「都市居住のイメージと住宅広告の役割に関する比較社会学的研究—超高層集合住宅の広告表現を準拠として—」住宅総合研究財団研究論文集40、2013年、117-128頁。
- 湯浅裕樹・鈴木義弘・岡俊江・切原舞子「多様化の時代における分譲独立住宅平面構成の経時的比較分析：わが国の独立住宅における住要求に関する研究その1」日本建築学会計画系論文集78(690)、2013年、1723-1732頁。
- 祐成保志「重装備化した住宅からの脱却—住空間の社会学の観点から」すまいろん88、2008年、15-21頁。
- 吉江俊・後藤春彦・山村崇「首都圏における住環境の価値表現としての住宅広告の「語

り」の時空間的動態」日本建築学会計画系論文集 80 (716)、2015 年、2231 - 2241 頁.

吉江俊・後藤春彦「社会属性と住環境欲求からみた首都圏生活者の住宅選好メカニズム」日本建築学会計画系論文集 81 (272)、2016 年、1959 - 1969 頁.

吉江俊・後藤春彦「都心回帰下の首都圏における住環境のイメージの空間構造とその推移」日本建築学会計画系論文集 82 (738)、2017 年、1955 - 1965 頁.

吉田桂二『間取り百年』彰国社、2004 年.

[参考 URL] (2020/07/31 最終閲覧)

大建工業株式会社 HP web カタログ

[https://www.catalabo.org/iportal/CatalogViewInterfaceStartUpAction.do?method=startUp
&mode=PAGE&volumeID=CATALABO&catalogId=56014640000&pageGroupId=&
designID=link&catalogCategoryId=&designConfirmFlg=](https://www.catalabo.org/iportal/CatalogViewInterfaceStartUpAction.do?method=startUp&mode=PAGE&volumeID=CATALABO&catalogId=56014640000&pageGroupId=&designID=link&catalogCategoryId=&designConfirmFlg=)

WEB 版 SUUMO (<https://suumo.jp/tochi/soba/osaka/area/>)

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Changes in the Image of a Japanese-Style Room and *Tatami*

Hiroyuki SHIMADA

In a survey conducted in a previous study on whether respondents wanted a Japanese-style room in their future home, about 90% of them responded in the affirmative.

However, there is a dearth in the number of Japanese-style rooms in presale houses in Japan. To identify the cause of these demand-supply gaps in Japanese-style room, we investigated changes in the expression used to describe Japanese-style rooms in housing advertisements.

A text mining study of changes in the expressions used to describe Japanese-style rooms in house advertisements from the 2000s to 2019 revealed that Japanese-style rooms were classified into five types : 1) traditional Japanese-style space, 2) modern circular space, 3) a guest room, 4) space for parenting, and 5) space for relaxation. Considering the changes over the years, it was clear that the expressions describing Japanese-style rooms had changed from projecting a style to projecting functionality. In addition, the functional interest resulted in *tatami* mats becoming increasingly important as floor coverings.

Further, in light of the history of *tatami* mats, the technological development of and the growing interest in the functionality of *tatami* mats may responsible for the increasing demand for *tatami* mats.